

介護福祉士養成教育における生命倫理教育に関する調査研究

井 村 圭 壮 田 路 慧
片 山 信 子 岡 野 初 枝
掛 橋 千賀子 森 下 早 苗
住 居 広 士

A Study of Bioethics Education in the Training of Care Workers

This survey was conducted concerning attitudes toward bioethics among students in care-worker training schools. For purposes of comparison, students of nurse-training schools were also studied. The students showed the following tendencies :

- (1) Care-work students have less interest in bioethics than nursing students do.
- (2) Care-work students are more negatively disposed toward euthanasia in a case of brain death than nursing students are.
- (3) In a survey, care-work students tend to answer that they wish to be under the care of a nursing specialist when they themselves become old and need bed care.
- (4) Nursing students tend to be more strongly conscious than care-work students of the need for bioethics education.

キーワード : 生命倫理 bioethics

植物状態 human vegetable

臓器移植 organ transplants

安楽死 euthanasia

死についての教育 education about death

I 序 言

現代、周知のごとく、わが国の高齢化は急激に進み、平成6年には高齢化率が推計14.1%となって本格的な「高齢社会」へと移行し、さらに「後期高齢者」と呼ばれる75歳以上の高齢者が急速に増加して「超高齢化社会」が出現しつつある状況である。死亡率の急速な低下により平均寿命は男76.3年、女82.5年と伸長し(1993年)、また65歳の人の平均余命は男16.4年、女20.6年となった。永年人々の悲願となってきた長寿社会の実現はまことにめでたいことであるが、人口の

超高齢化はまた要介護老人の激増などさまざまな社会問題を惹起することになったのである。

高齢化社会は出生率の低下による少子化、経済生活の向上、社会環境の整備、とくに医学の進歩による公衆衛生の向上、栄養の改善、社会保険制度による医療サービスの普及、そして延命医療技術の著しい発達による死亡率の急速な低下によってもたらされたものである。後期高齢者の急速の増加と少子化による若年人口の激減、人口の都市集中と核家族化は、高齢者のみの単独世帯や独居老人を増加させ、従前のような家族による扶養と介護を非常に困難となしてきている。さらに時代とともに親孝行などといった美德はすたれ、もはや子供の世話になりながら老後を楽しむということが極めて困難な時代となったのである。医療技術の著しい発達は延命をもたらすとともに、病弱や痴呆や寝たきり、植物状態や種々の障害などを持つ要介護老人を激増させ、家族の負担を過重なものにするとともに、一方では老人自身にとっても、死にたくても死なせてもらえないような状態をもたらし、ただ生かされ続けるという悲惨な状態をもたらすこととなった。ここにおいて尊厳死や生命の質など生命の根源にかかわる問題が顕現し、脳死、臓器移植、人工授精、遺伝子操作などとともに、生きるということはどういうことか、生命そのもののあり方に関する根源的な問としての生命倫理の探究が提起されてきたのである。

国は平成元年12月高齢者の保健福祉分野における具体的な基盤整備の目標として、「高齢者保健福祉推進十か年戦略」（ゴールドプラン）を策定し、特別養護老人ホーム、老人保健施設、ケアハウスなどを建設整備し、ホームヘルパー、介護職員、看護職員、OT・PTなどのマンパワー31.5万人を養成確保することを計画した。さらに介護保険を導入し、相互扶助とともに要介護者が主体的に権利として福祉サービスを利用する道も開こうとされている。このように看護・介護者の養成が急務となっているが、この際特に留意しなければならないのは、いうまでもなく量よりも質の問題である。より弱い立場にある患者や老人や障害者に密室で対処する医療・看護・介護・保健・福祉等の従事者には高度な専門的技術の習得と共に、より高く豊かな人間性と倫理性、より強い人権感覚が要請される。不治の病気や障害をもち死に直面している人々に応対するターミナルケアにおいては、特に看護者と介護者の役割は重要であり、より深い老・病・障害・死に直面する人の心の理解、人間観死生観が要求される。かくて人間観死生観の探究と共に、生命の根源的なあり方を問い、生命と科学技術との係り方を探究確立せんとするバイオエシックスを学び、研究習得し、活用することは医療・看護・介護福祉従事者にとっては必須不可決のことである。かかる観点より岡山県立大学生命倫理研究会では特に医療・看護・介護・福祉事業従事者養成教育における生命倫理教育の構築を目指して研究を続け、その基礎資料を得るため学生たちの意識調査を行ってきた。その中で本論では介護福祉士養成施設に在学する学生たちの老人問題や生命倫理に関する問題に対する意識構造を、看護婦養成施設の学生たちの意識調査の結果と対比しつつ、分析考察しその実態を報告したい。

Ⅱ 研究方法

1. 調査対象

本調査研究では、「社会福祉士介護福祉士学校職業能力開発校等養成施設指定規則」第7条第1項に規定された「介護福祉士養成施設」（修業年限2年以上）の学生を調査対象としている。特に、今回は全国から8校の養成校を選定し、集合調査の形式で調査を実施した。有効回答票による集計サンプル数は442名である。また、今回は「介護福祉士養成施設」の学生を調査するにあたって、保健・医療・福祉に関連する職種として今後その連携支援等が問われている看護系の学生を比較群（4校）として解析に加えた。集計サンプル数は225名である。

2. 調査方法

調査方法は、質問紙による集合調査法を取っている。調査期間は、1993年10月～1994年2月である。

Ⅲ 結果及び考察

1. 「生命倫理」という言葉への知識

まず、「生命倫理」という言葉を何によって知ったかについて尋ねてみた。Table Ⅲ-1に示すように、全体では64.0%の比率で「知らなかった」と答えている。また、知識として「生命倫理」を知っている学生は36.0%になるが、そのうち24.7%が「新聞、雑誌、テレビなどのマスコミ」と答えている。以下、「大学の講義」7.7%、「その他」3.3%、「友人から」0.3%となった。「介護福祉系学生」「看護系学生」の間には顕著な差がみられ、「介護福祉系」に「生命倫理」について「知らなかった」と答える比率（72.7%）が高くなっている。このことは、「介護福祉系学生」の81.4%が「1年生」である（「看護系学生」は56.3%が「1年生」）ことに起因しているとも考えられるが、「看護系学生」に比べて、「生命倫理」あるいは近接領域への関心の薄さ、あるいは日常生活の中で意識化されていない状況が読み取れよう。

2. 「親しい人の死の体験」および「自分の死についての意識」

「あなたは最近自分と親しい人の死を体験したことがありますか」という設問には、Table Ⅲ-2に示すように、「介護福祉系学生」の57.3%が「なし」と答えている。死を体験した選択肢の中では「祖父母の死」が19.5%で最も高くなっている。「看護系学生」との間に有意な差はみられない。

次に、「自分の死について」どのようなとき意識したかについて尋ねているが、「意識したり考えたことはない」学生は7.3%と低率であった。ただし、「自分の死」を意識していても「ふとなんとなく」が38.0%で最も高く、次いで「人生について考えた時」13.6%となっており、ある意味では観念的な視点からの死への意識とも考えられる。因みに、「介護福祉系学生」として「実習に行って」死を意識した者は4.3%（19名）であった。

3. 「脳死」と「脳死状態の臓器移植」

「脳死」という言葉については98.0%の学生が「知っている」と回答している (Table Ⅲ-4)。では、「脳死を死の判定」とする考え方に関しては、「介護福祉系学生」はいかなる捉え方をするのであろうか。Table Ⅲ-5のように、「賛成」が29.4%、「反対」18.1%、「どちらともいえない」52.5%であった。このことは、脳死を死の判定とする考え方に明確な論理を持ちえていないか、あるいは慎重な態度からこの問題を捉えようとしているとも推測されよう。

次のTable Ⅲ-6に示している「脳死状態での臓器移植について ※一般的にみて」とした設問に対して、41.6%の比率で「賛成」と答えている点は留意しておかなければならない。つまり、脳死を死と判定することに「賛成」する学生は29.4%にすぎなかったが、脳死状態での臓器移植には41.6%の高率で「賛成」とするという矛盾した考え方とも取れる傾向が出ているのである。よって、「脳死を死の判定」とする根本的な脳死への意識(価値観)は明確化されず、より具体的なテーマである「臓器移植」については自己としての考えを提示しようとする安易な回答が示されているのではないかと懸念される。このことは、Table Ⅲ-7に示すように、「臓器提供者側になった場合 ①自分の場合」において、59.0%の学生が「提供する」という肯定的回答を示していることから察知されよう。臓器提供(自分の場合)について「どちらともいえない」は28.7%に止まっている。

4. 「植物状態」と「安楽死」について

「植物状態」という言葉を知っているかどうかについては、「介護福祉系学生」の98.2%、「看護系学生」の99.6%が「はい」と答えている。ただし、「自分が植物状態になった時、生きていたいですか」とした設問に関しては有意差がみられ、「看護」では僅か3.6%の比率で「はい」と回答するのに対し、「介護福祉系」では10.7%が「はい」と回答するのである。全体的には、植物状態で生かされ続けることへは、拒絶反応を示す傾向にあるといえよう。

次に、「家族が植物状態になった時、生きていて欲しいですか」については、「介護福祉系学生」で35.2%、「看護系学生」で44.9%の者が「どちらともいえない」と回答しており、家族のことになると態度を決めかねているようである。ところが、この設問においても、「介護福祉系学生」で「はい」と回答する者が42.3%と、「看護系」より明らかに多く、「植物状態」での人間の生存に関して、肯定的ともいえる考え方(枠組み)を示しているのである。なお、こうした「介護福祉系学生」の意識傾向が確固たる信念あるいは科学的根拠によるものであるかどうかは断定できない。

Table Ⅲ-15~18には「安楽死」に関する設問事項を置いている。「介護福祉系」と「看護系」との間に差は見られないため、全体的側面から捉えてみるが、「植物状態における安楽死に賛成ですか。※一般的にみて」という設問では、「賛成」(49.8%)と「どちらともいえない」(40.6%)とが相拮抗していることがわかる。ただし、安楽死について「自分の場合」になると「賛成」するが69.7%と高率になり(TableⅢ-17)、逆に「家族の場合」は安楽死に「賛成」するは38.

4%と低くなっており、家族のことになると態度を決めかねている現象がみえてくる。

以上、ここまでは「脳死」「脳死状態の臓器移植」あるいは「植物状態」および「安楽死」に関する設問(TableⅢ-4~18)を投げかけてみたが、最後に各設問における「肯定的選択」と「否定的選択」に限定した視点から、「介護福祉系学生」、「看護系学生」の間の有意性について分析してみたい。なお、「肯定的選択」とは、各設問に「賛成」あるいは「提供する」と回答したことを意味する。また、「否定的選択」とは、各設問に「反対」あるいは「提供しない」と回答したことを意味する。Table に示しているように、顕著な差となって表れているのは「植物状態の時・自分の生」および「植物状態の時・家族の生」であり、「介護福祉系学生」に肯定的選択を示す傾向が読み取れる。つまり、「自分が植物状態になった時、生きていたいですか」「家族が植物状態になった時、生きていて欲しいですか」という設問に「はい」と答える比率が「介護福祉系学生」に高くなっているのである。また、「植物状態の時、安楽死」に関する設問では、「介護福祉系学生」に安楽死について否定的傾向を示しているのであった。

Table 脳死・植物状態・安楽死に関する設問事項

	「肯定」選択				「否定」選択			
	介護福祉	看護	χ^2 値 df = 1	P	介護福祉	看護	χ^2 値 df = 1	P
脳死を死の判定	29.4	30.7	0.112	ns	18.1	11.1	5.490	*
脳死状態移植一般的	41.6	44.4	0.464	ns	12.0	11.2	0.087	ns
脳死状態移植自分提供側	59.0	62.7	0.815	ns	12.2	15.1	1.090	ns
脳死状態移植家族提供側	26.5	21.1	2.369	ns	25.9	31.4	2.269	ns
脳死状態移植自分受入れ	38.9	43.1	1.111	ns	22.4	22.7	0.004	ns
脳死状態移植家族受入れ	53.1	58.9	2.067	ns	8.8	4.9	3.304	+
植物状態の時自分の生	10.7	3.6	9.919	***	76.6	84.4	5.519	*
植物状態の時家族の生	42.3	30.7	8.482	***	22.5	24.9	0.475	ns
植物状態の時安楽死一般的	47.7	53.8	2.176	ns	10.6	7.6	1.628	ns
植物状態の時安楽死自分	69.8	69.2	0.013	ns	11.8	5.5	3.127	+
植物状態の時安楽死家族	36.5	42.2	2.056	ns	19.0	12.4	4.644	*

+ P < 0.1 ** P < 0.05 *** P < 0.01 **** P < 0.001

5. 「老人（祖父母等）との同居経験」および「老後への思考」

「あなたは老人（祖父母等）と同居した経験がありますか」という設問については、「介護福祉系」の場合、36.2%が「現在同居している」と答えている。「過去に同居していた」とを合計すると、60.2%の者が老人との同居経験が有ということになる。この点については「看護系」との間に明確な差がみられ、「看護系学生」では50.5%が「なし」と回答している（Table III-19）。

次に、「自分の老後について考えたことがあるかどうか」について尋ねているが、Table III-20のように、全体で71.0%の学生が「ある」と回答している。この比率をいかに捉えるかは慎重な分析が必要であろうが、自分の老後について考えたことが「ない」とする学生が29.0%も存在していることを述べておく。因みに、「両親の老後」について考えたことが「ない」と解答する学生が12.5%であることも見逃すことのできない現象である（Table III-21）。

6. 両親の「介護」について

「両親が老いて介護を要するようになったとき、どうするか」について、「自分で介護する」「専門職に任せる」「わからない」といった選択肢を設けてみると、やはり「自分で介護する」が73.9%で最も多くなっている。「看護系学生」との間に有意差はみられないが、「看護系学生」では「専門職に任せる」は1.3%（3名）にすぎない（Table III-22）。

次に、両親の介護を「家族のうちで、特に誰が面倒をみたらよいか」について尋ねているが、Table III-23 に示すように、「自分」が66.7%で最も多くなっている。以下、「兄弟」11.9%「その他」10.8%、「配偶者」5.9%、「嫁または婿」3.7%の順であった。両親の老後の介護を家族の中では「自分」が担当するという傾向は、一面では調査対象者のほとんどが女性であり、同時に両親が高齢者と位置づけられる年齢に達していないため、現実性に欠けた反応を形成しているのかもしれない。

では、「両親が老いて介護が必要になった場合、どこで世話をしたらよいか」に関しては、Table III-24 のように、「介護福祉系」「看護系」とも「家庭」が88.9%、87.0%で最も多くなっている。ただし、有意差は出しており、「介護福祉系」では両親の介護を「福祉施設」と選択する者が7.0%となっており、「看護系」に比較し若干比率が高くなっている。また、「病院」を選択する比率は「看護系」に高くなっていることがわかる。

7. 「自分が老いて介護が必要になったとき」

では、「介護福祉系学生」は、将来的に自己の介護をいかに考えているのであろうか。Table III-25 に示すように、「自分が老いて介護が必要になったとき、誰に見てもらいたいか」という設問には、「娘」を選択する者が31.1%で最も多いことがわかる。また、「介護福祉系学生」の場合は「介護専門職」が25.3%で2位となっており、この点は「看護系学生」と著しく異なる傾向を示している。この設問は単一回答形式であったことから、無制限または制限複数回答形式であれば、「介護専門職」と回答する比率はかなり高くなることが予測される。

次に、「自分が老いて介護が必要になった場合、どこで世話をしてもらいたいか」という設問では、やはり「家庭」が63.1%と高くなっている (Table III-26)。ただし、Table III-24 で取り上げた「両親の介護」について尋ねた同様の設問には、88.9%の学生が「家庭」と答えているのであり、自分の介護になると「家庭」へ依存する比率が20%以上低下していることがわかる。自分の将来の介護の場を家庭と位置づけない要因には、Table III-26 からは「ケア付きマンション」(23.5%)や「福祉施設」(11.6%)を選ぶ学生が多いことから理解されようが、こうした社会的機能（サービス）への比率が高いことは、先の「介護専門職」に頼りたいという意識とともに新しい傾向として留意しておく必要があるとともに、家庭での介護が困難になりつつある状況を意識的にも無意識的にも自覚している社会的要因がその背景にあるように思われる。なお、「あなたは死をどこで迎えたいか」といった人間の根元的問いかけには、「家庭」で迎えたいと回答する者が88.9%と高くなっている。因みに、「福祉施設」は1.4%、「病院」2.1%、「ホスピス」2.7%であった。「看護系」との比較では、「ホスピス」において「看護系学生」の比率(10.3%)が高くなっている (Table III-27)。

8. 「死」、 「生命倫理」 についての教育

「あなたは死についての教育は必要だと思いますか」という問いかけには、Table III-28 のように、70.0%の学生が「思う」と回答している。「看護系学生」との間に有意差はみられないが、若干「看護系」に死についての教育を必要と感じている学生が多いようである。「介護福祉系学生」では、9.6%(42名)が「思わない」と答えている。また、死の教育の必要性について「どちらともいえない」者が20.4%も存在しており、高齢者等を支援していく「介護福祉系学生」にとって、死生観等の教育上の課題が潜在しているとも解釈できよう。

最後に、「あなたは生命倫理についての教育は必要だと思いますか」という設問を投げかけてみた。Table III-29 に示しているように、「介護福祉系学生」と「看護系学生」では著しい差が表われているのである。つまり、「介護福祉系学生」で「生命倫理」についての教育が必要と「思う」比率は51.1%に止まっているのに対し、「看護系学生」では75.4%が「思う」と答えており、「介護福祉系学生」の「生命倫理」教育への要求度が確実に低いことが理解できる。このことは、「介護福祉系学生」に「生命倫理」教育の必要性について「どちらでもない」と回答する者が44.3%に達していることから頷ける結果である。

Table III-1 「生命倫理」という言葉を何により知りましたか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①新聞、雑誌、テレビなどのマスコミ	80	18.2	84	37.5	164	24.7
②友人から	2	0.5	0	0.0	2	0.3
③大学の講義で	27	6.2	24	10.7	51	7.7
④その他	11	2.5	11	4.9	22	3.3
⑤知らなかった	319	72.7	105	46.9	424	64.0

$$\chi^2 = 45.329 \quad P < 0.001$$

Table Ⅲ-2 あなたは最近自分と親しい人の死を体験したことがありますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①祖父母の死	85	19.5	57	25.3	142	21.5
②父の死	7	1.6	4	1.8	11	1.7
③母の死	5	1.1	2	0.9	7	1.1
④兄弟姉妹	1	0.2	0	0.0	1	0.2
⑤親友	22	5.0	4	1.8	26	3.9
⑥その他	66	15.1	30	13.3	96	14.5
⑦なし	250	57.3	128	56.9	378	57.2

 $\chi^2=7.358$ n.s**Table Ⅲ-3** あなたは自分の死について、どんなとき意識したり考えたりしましたか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①肉親の死に出会った時	33	7.5	14	6.3	47	7.1
②友人・知人の死に出会った時	47	10.7	16	7.2	63	9.5
③ふとなんとなく	167	38.0	84	37.7	251	37.9
④自分が病気になった時	26	5.9	19	8.5	45	6.8
⑤実習に行って	19	4.3	9	4.0	28	4.2
⑥人生について考えた時	60	13.6	43	19.3	103	15.5
⑦テレビや新聞の死亡報道を見て	45	10.2	19	8.5	64	9.7
⑧その他	11	2.5	5	2.2	16	2.4
⑨意識したり考えたことはない	32	7.3	14	6.3	46	6.9

 $\chi^2=7.480$ n.s**Table Ⅲ-4** あなたは「脳死」という言葉を知っていますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①知っている	432	98.0	225	100.0	657	98.6
②知らない	9	2.0	0	0.0	9	1.4

 $\chi^2=3.250$ n.s**Table Ⅲ-5** 普通心臓の停止をもって「死」とされていますが、最近は脳死をもって「死」とする考え方があります。あなたは脳死を「死」の判定とする考え方についてどう思いますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①賛成	130	29.4	69	30.7	199	29.8
②反対	80	18.1	25	11.1	105	15.7
③どちらともいえない	232	52.5	131	58.2	363	54.4

 $\chi^2=5.605$ n.s**Table Ⅲ-6** 脳死状態の臓器移植について ※一般的に見て

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①賛成	184	41.6	99	44.4	283	42.6
②反対	53	12.0	25	11.2	78	11.7
③どちらともいえない	205	46.4	99	44.4	304	45.7

 $\chi^2=0.471$ n.s**Table Ⅲ-7** 脳死状態の臓器移植について ※臓器提供者側になった場合 イ) 自分の場合

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①提供する	261	59.0	141	62.7	402	60.3
②提供しない	54	12.2	34	15.1	88	13.2
③どちらともいえない	127	28.7	50	22.2	177	26.5

 $\chi^2=3.652$ n.s

Table Ⅲ-8 脳死状態の臓器移植について ※臓器提供者側になった場合 ロ) 家族の場合

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①提供する	117	26.5	47	21.1	164	24.7
②提供しない	114	25.9	70	31.4	184	27.7
③どちらともいえない	210	47.6	106	47.5	316	47.6

 $\chi^2 = 3.424$ n.s**Table Ⅲ-9** 脳死状態の臓器移植について ※臓器を受ける立場の場合 イ) 自分の場合

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①受ける	175	38.9	97	43.1	272	40.3
②受けない	101	22.4	51	22.7	152	22.5
③どちらともいえない	174	38.7	77	34.2	251	37.2

 $\chi^2 = 1.464$ n.s**Table Ⅲ-10** 脳死状態の臓器移植について ※臓器を受ける立場の場合 ロ) 家族の場合

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①受ける	234	53.1	132	58.9	366	55.0
②受けない	39	8.8	11	4.9	50	7.5
③どちらともいえない	168	38.1	81	36.2	249	37.4

 $\chi^2 = 4.133$ n.s**Table Ⅲ-11** 脳死状態の臓器移植について

※脳死の状態での臓器移植に次のうち必要なものはなんだと思いますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①本人の承諾	89	20.2	74	32.9	163	24.5
②家族の承諾	43	9.8	12	5.3	55	8.3
③本人及び家族の承諾	304	69.1	139	61.8	443	66.6
④何もいらない	4	0.9	0	0.0	4	0.6

 $\chi^2 = 16.525$ $P < 0.001$ **Table Ⅲ-12** あなたは「植物状態」という言葉を知っていますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①はい	434	98.2	224	99.6	658	98.7
②いいえ	8	1.8	1	0.4	9	1.3

 $\chi^2 = 1.189$ n.s**Table Ⅲ-13** 自分が「植物状態」になった時、生きていたいですか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①はい	47	10.7	8	3.6	55	8.3
②いいえ	338	76.6	190	84.4	528	79.3
③どちらともいえない	56	12.7	27	12.0	83	12.5

 $\chi^2 = 10.301$ $P < 0.01$ **Table Ⅲ-14** 家族が「植物状態」になった時、生きていて欲しいですか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①はい	186	42.3	69	30.7	255	38.3
②いいえ	99	22.5	56	24.9	155	23.3
③どちらともいえない	155	35.2	100	44.9	255	38.3

 $\chi^2 = 8.892$ $P < 0.05$

Table Ⅲ-15 あなたは「安楽死」という言葉を知っていますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①はい	439	99.3	225	100.0	664	99.6
②いいえ	3	0.7	0	0.0	3	0.4

$$x^2 = 0.393 \text{ n.s}$$

Table Ⅲ-16 あなたは植物状態における「安楽死」に賛成ですか。※一般的に見て

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①賛成	211	47.7	121	53.8	332	49.8
②反対	47	10.6	17	7.6	64	9.6
③どちらともいえない	184	41.6	87	38.7	271	40.6

$$x^2 = 2.887 \text{ n.s}$$

Table Ⅲ-17 あなたは植物状態における「安楽死」に賛成ですか。※自分の場合

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①賛成	308	69.8	63	69.2	371	69.7
②反対	52	11.8	5	5.5	57	10.7
③どちらともいえない	81	18.4	23	25.3	104	19.5

$$x^2 = 4.637 \text{ n.s}$$

Table Ⅲ-18 あなたは植物状態における「安楽死」に賛成ですか。※家族の場合

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①賛成	161	36.5	95	42.2	256	38.4
②反対	84	19.0	28	12.4	112	16.8
③どちらともいえない	196	44.4	102	45.3	298	44.7

$$x^2 = 5.155 \text{ n.s}$$

Table Ⅲ-19 あなたは老人（祖父母等）と同居した経験がありますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①現在同居している	160	36.2	35	16.2	195	29.6
②過去に同居していた	106	24.0	72	33.3	178	27.1
③なし	176	39.8	109	50.5	285	43.3

$$x^2 = 28.061 \text{ } P < 0.001$$

Table Ⅲ-20 あなたは「自分の老後」について考えたことがありますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①ある	310	70.3	162	72.3	472	71.0
②ない	131	29.7	62	27.7	193	29.0

$$x^2 = 0.296 \text{ n.s}$$

Table Ⅲ-21 自分の「両親の老後」について考えたことがありますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①ある	387	87.6	196	87.5	583	87.5
②ない	55	12.4	28	12.5	83	12.5

$$x^2 = 0.000 \text{ n.s}$$

Table Ⅲ-22 あなたの両親が老いて「介護」を要するようになったとき、あなたはどうしますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①自分で介護する	325	73.9	175	78.1	500	75.3
②専門職に任せる	19	4.3	3	1.3	22	3.3
③わからない	96	21.8	46	20.5	142	21.4

$$x^2 = 4.448 \text{ n.s}$$

介護福祉士養成教育における生命倫理教育に関する調査研究

Table Ⅲ－23 あなたの両親が老いて「介護」を要するようになったとき、家族のうちで特に誰が面倒をみたら良いと思いますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①自分	296	67.7	158	71.5	454	69.0
②兄弟	52	11.9	19	8.6	71	10.8
③配偶者	26	5.9	16	7.2	42	6.4
④嫁または婿	16	3.7	4	1.8	20	3.0
⑤その他	47	10.8	24	10.9	71	10.8

$$x^2 = 3.823 \quad n.s$$

Table Ⅲ－24 両親が老いて「介護」が必要になった場合、どこで世話をしたら良いと思いますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①家庭	391	88.9	193	87.0	584	87.0
②福祉施設	31	7.0	12	5.4	53	7.9
③病院	4	0.9	9	4.1	13	1.9
④その他	14	3.2	8	3.6	22	3.3

$$x^2 = 8.184 \quad P < 0.05$$

Table Ⅲ－25 自分が老いて「介護」が必要になったとき、誰にみてもらいたいと思いますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①配偶者	105	24.4	81	37.0	186	28.6
②息子	28	6.5	8	3.7	36	5.5
③娘	134	31.1	72	32.9	206	31.7
④嫁	16	3.7	5	2.3	21	3.2
⑤孫	2	0.5	0	0.0	2	0.3
⑥介護専門職	109	25.3	30	13.7	139	21.4
⑦看護専門職	3	0.7	12	5.5	15	2.3
⑧その他	34	7.9	11	5.0	45	6.9

$$x^2 = 37.533 \quad P < 0.001$$

Table Ⅲ－26 自分が老いて「介護」が必要になった場合、どこで世話をしてもらいたいと思いますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①家庭	277	63.1	141	63.5	418	63.2
②福祉施設	51	11.6	21	9.5	72	10.9
③病院	2	0.5	2	0.9	4	0.6
④ケア付きマンション	103	23.5	55	24.8	158	23.9
⑤考えていない	6	1.4	3	1.4	9	1.4
⑥その他	0	0.0	0	0.0	0	0.0

$$x^2 = 1.224 \quad n.s$$

Table Ⅲ－27 あなたは死をどこで迎えたいですか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①家庭	389	88.9	186	83.0	575	86.9
②福祉施設	6	1.4	3	1.3	9	1.4
③病院	9	2.1	7	3.1	16	2.4
④ホスピス	12	2.7	23	10.3	35	5.3
⑤その他	22	5.0	5	2.2	27	4.1

$$x^2 = 19.989 \quad P < 0.001$$

Table III - 28 あなたは「死」についての教育は必要だと思いますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①思う	306	70.0	169	75.8	475	72.0
②思わない	42	9.6	12	5.4	54	8.2
③どちらともいえない	89	20.4	42	18.8	131	19.8

$$x^2 = 4.084 \quad n.s$$

Table III - 29 あなたは「生命倫理」についての教育は必要だと思いますか。

回 答 項 目	介護福祉		看 護		全 体	
①思う	223	51.1	169	75.4	392	59.4
②思わない	20	4.6	2	0.9	22	3.3
③どちらともいえない	193	44.3	53	23.7	246	37.3

$$x^2 = 37.626 \quad P < 0.001$$

IV 結 語

最後に全体としての総合的な考察を述べておきたい。「生命倫理」という言葉の知識について「介護福祉系」の72.7%の学生が「知らなかった」と答え、「看護系」の学生の46.9%, 調査学生全体の64.0%に比して顕著な差が出ていることは問題であるといえよう。「知っている」と答えた学生は主としてマスコミからその知識を得ているところを見ると、「介護福祉系学生」の生命倫理問題への関心の低さを表しているようであるが、しかし、「脳死」とか「植物状態」「安楽死」といったマスコミによく登場する具体的な事柄についてはほぼ全員が知っているので、体系的系統的な知識の不足と思われる。従って「生命倫理」に関する講義科目を設定し体系的統一的な知識や考え方の教育をすることが望ましいであろう。

「親しい人の死の体験」については「介護福祉系学生」の57.3%が「なし」と答えている。一方92.7%の学生が「自分の死を意識したり考えたことがある」と答えている。しかしその契機は「ふとなんとなく」が38.0%「人生について考えた時」が13.6%で、死の把握の仕方が抽象的観念的であることを示している。この点に関しては「看護系学生」とほとんど差がなかった。潜在的顕在的に死の恐怖や不安にさらされる老人や病人の気持ちを十分に理解することは介護や看護をするものにとって不可決のことであるから、養成教育においては「死」についての教育を十分に行うことが望ましいであろう。

「脳死」と「臓器移植」に関する項目においては、介護、看護いずれの学生においても、その言葉の概念が十分に理解されておらず混乱や矛盾が見られるが、特に「介護福祉系」の学生に「どちらとも言えない」という態度の保留が比較的多いのは、やはり知識の不確かさと理解の低さを表しているであろう。ここでも正確な知識の教授の必要性が伺われる。

「植物状態」と「安楽死」についての項目においては、植物状態で生かされ続けることには強い拒絶反応が見られ、自分の場合「植物状態における安楽死」に介護・看護とも69%余の学生が賛成している。しかし家族の場合になると「賛成」が「介護福祉系」36.5%、「看護系」で42.2%あり、「どちらとも言えない」はほぼ同率である。

最近「安楽死」が「尊厳死」と呼ばれて宣伝され、「クオリティ オブ ライフ」が強調されるようになってきているが、これらの事柄は生命の差別と選別につながる重大な問題をはらんでおり、軽々しく云々されるべきことではないであろう。ここでも生命に関する深い洞察が求められ、生と死への精緻な考察が望まれる。この点からも特に介護・看護学生への生命倫理教育の重要性が伺われる。

老人問題に関する事柄について若干述べておきたい。調査学生の40%余が老人との「同居経験がない」と答えているが、老人に対処することの多い介護・看護の学生の教育においてはこの点十分に留意すべきである。まず何よりも老いや老人についての正しい知識と理解を教授することが重要であることを示している。両親の介護については「自分が家庭で行う」と大半の学生が答えているが、これは現実と直面していない学生の願望を表したものであろう。一方「自分の老後の介護」については「娘」や「息子」や「嫁」への期待はぐっと少なくなり、「配偶者」や「介護専門職」への期待が一段と高くなっている。また介護の場も「家庭」が減り、「福祉施設」や「ケア付きマンション」が増えている。このことは自分達が介護専門の学生であることの自覚と共に、少子化、核家族化によって家族による介護が困難になりつつある現実を直感的に意識していることを示しているのであろう。国や地方公共団体による介護体制の整備が焦眉の急となっていることの反映でもあるのかもしれない。

最後に「死と生命倫理に関する教育」についての質問では、「介護福祉系学生」の9.6%が「必要ではない」、20.4%「どちらとも言えない」と答えており、また「生命倫理教育」については4.6%が「必要ではない」と答え、44.3%が「どちらとも言えない」と態度を保留している。調査学生全体や「看護系学生」に比して「介護福祉系学生」の意識の低さを著しく提示している。「介護ということ」について理解が浅いのか、介護者への自覚が足りないのか、志望の動機が看護職に比して安易であるののだろうか。

以上の考察からこの調査結果は、医療・介護・看護職志望学生は言うに及ばず、すべての若者に、中高生段階から、正しい生命観・死生観・老人観そして生命倫理問題を探究し考察し確立するための教育の機会を与えることの重要性を提起しているということができよう。

〔参考文献〕

- 1) 田路慧, 片山信子他「生命倫理・老人問題に関する現代学生の意識構造の研究」岡山県立大学短期大学部研究紀要 第2号 1995年
- 2) 片山信子, 田路慧他「看護者養成教育における生命倫理教育のあり方について」第19回 日本看護学会集録 1988年
- 3) 岡野初枝他「現代の看護, 介護, 医歯学生のもつ老人観に関する研究」中国四国地区看護研究学会集録 1994年
- 4) 掛橋千賀子他「生命倫理に関する意識調査からみた現代青年の生命観の実態」看護展望 Vol. 15 No.6 1990年

- 5) 中山治, 水谷信子他「生命倫理(bioethics)に関する看護学生の認知構造 <1>」
看護展望 Vol.10 No.6 1985年
- 6) 花野典子, 進藤洋子「死に対するイメージとその関連要因－看護学生と介護学生の比較－」
帝京平成短期大学紀要 第4号 1994年
- 7) 成清美治「専門職としての介護福祉士」ソーシャルワーク研究 Vol.19 No.2 1993年
- 8) 保良昌徳「介護福祉士の専門職化に関する一考察」沖縄国際大学紀要 18(1) 1991年
- 9) 重田信一「介護福祉士養成施設の課題」ソーシャルワーカー 第2号 1991年
- 10) 井村圭壮, 田路慧「社会福祉専門職における生命倫理のあり方に関する研究」
草の根福祉 第23号 1995年

(平成7年11月30日受付)
(平成8年1月18日受理)